

Saul Bellow の Isaac Rosenfeld に対する オマージュとしての “Zetland”

大工原 ちなみ

富山大学人文学部紀要第 68 号抜刷

2018 年 2 月

Saul Bellow の Isaac Rosenfeld に対する オマージュとしての “Zetland”

大工原 ちなみ

“Zetland” は Saul Bellow によって 1974 年に書かれ、1984 年に出版した短編である *Him with His Foot in His Mouth and Other Stories: Collected Stories* に収録されており、正確なタイトルは “Zetland: By a Character Witness” である。(今後作品中でこの作品に言及する際には、副題を省略して “Zetland” と記す。) Bellow には、Isaac Rosenfeld と Delmore Schwartz という親友であり文学的なライバルでもある 2 人の作家が身近にいた。Bellow を含め 3 人とも一応の文学的な成功を収め、新進気鋭の若きユダヤ系知識人として評価されるが、最終的にノーベル賞受賞という栄誉を Bellow が得たのに対して、ほかの二人は、私生活の面も含めて行き詰まりやがて転落していく。自らの上昇と友人たちの転落は、彼のいくつかの小説の中で主要テーマとして描かれている。たとえば、Delmore Schwartz については、“Zetland” の翌年の 1975 年に発表された *Humboldt's Gift* の主人公 Citrine として、その栄光と転落の人生と重ね合わせるように描かれている。この小論では、Isaac Rosenfeld をモデルとして描いた “Zetland” と二人の伝記に焦点を当てて、不遇のうちに若くして亡くなった友であり、最大のライバルでもあった Isaac Rosenfeld に対するオマージュとして、この短編を Bellow が捧げたという観点から考察を試みたい。

神童

David Mikics の *Bellow's People* や James Atlas の *Bellow: A Biography* には、共に過ごしたシカゴ時代から順を追って、Bellow と Rosenfeld の友情が描かれている。それらと合わせて、“Zetland” に描かれた Isaac Rosenfeld 像をとらえてみたい。“Zetland” は Bellow 後期に書かれた 25 枚足らずの短編である。そこには Zetland 14 歳当時のシカゴでの神童ぶりから始まり、病弱ではあったが、スポーツや音楽にも秀でていたことなど Rosenfeld の実人生に沿う形で記されている。

Zetland は「ポーランド人やウクライナ人、スウェーデン人、カトリック、東方教会、福音主義、ルーテル派が大半を占める」(196) というユダヤ人が少ない地域で、頑固な父と二人の叔母に育てられる。Isaac Rosenfeld は 1918 年 3 月 10 日に生まれているが、わずか 22 か月の時にまだ若かった母を亡くしている。父は再婚し娘ができるが、知的障がいがあった。この母も亡くなると彼女の若いことと再婚するが夫婦仲はよくなかったようである。“Zetland” にも、「最初の妻は 1918 年にインフルエンザで亡くなり、2 番目の妻との間に知能の遅れた娘を授かる

が、この妻も乳がんで亡くなる。3番目の妻は2番目の妻のいとこだが、ずっと若かった」(199)と記され実際の父の Sam のケースと同様に描かれている。

物語には父の外見や娘のことも書かれているが、最も重要なことは、父が、ロシア語やイディッシュ語で書かれた詩を読み、あらゆる芸術家と共にいることを好み、エンマ・ゴールドマンやレーニン、トロツキなどの革命思想に共感し、読書によって天文学や哲学まであらゆる知識を身につけ、近所で開かれる学習会に招かれるほどの「知識人」であった点であろう。当然父の生きざまが息子に影響を与えるとともに、父の息子に対する過大な期待が生じることになる。

この作品の書き出しは “Yes, I knew the Guy. We were boys in Chicago. He was wonderful. At fourteen, when we became friends, he had things already worked out and would willingly tell you how everything had come about.” (195) となっているように、Bellow を彷彿させる語り手が、早くも手放して14歳のZetland(=Isaac Rosenfeld)を褒め称えている。それに続くやや長めの文章では、彼が、有史以前の地球の始まりから現代に至るまでのあらゆる分野のことに精通していることを語り、読書好きな賢い少年であったと語っている。

ただし Rosenfeld のこの天才ぶりは多分に父親に強制された結果という側面も持っている。彼の父親の Sam Rosenfeld は息子に音楽とハイカルチャーを身に着け、「小さなインテリ」になることを求めた。そのため彼は、カントやヴォルテール、ルソー、ニーチェ、ヒュームといった哲学のみならず、ダダやシュールリアリズムといった芸術やトルストイ、ハイネのような文学にも精通する天才ぶりを発揮したうえ、「バイオリンを演奏し、視奏もできた」(196)という音楽性まで身に着ける。

David Mikics も “Rosenfeld's own dreaminess, his luftmensch nature, was a reaction against his father, who pushed him to be an overachiever, a little boy genius.” (97) と指摘しているように、Rosenfeld 自身は、彼に知識の習得を強制し小さなインテリになることを強いる父親に対して反感を抱いており、「ゆがめられた天才」として決して持てなかった純粋な子供時代へあこがれを抱いているのである。

また、父の教育方針が災いしたのか Rosenfeld がひ弱であったことは Mikics 等の本の中でも指摘されている。それと符合するかのようZetlandも健康状態は決して良好とは言えず、腹膜炎に肺炎、肋膜炎、肺気腫、肺結核と次々に患っている。生涯の中で一度しかない子供時代を子供らしく過ごせなかったために生じたゆがみが、異様な形で彼の純粋さを保つことに力を貸し、その後の彼の人生を形成していくことになるのである。

Bellow にとって以上のような Rosenfeld は「イディッシュの妖精かケルビムのような魅力的存在」(Mikics, 96)であった。Bellow は Rosenfeld を崇拝したが、それと同時に彼のイノセンスは軽蔑していたようである。ここにも Bellow の Rosenfeld に対する限らない愛情とその陰に

隠れたライバル意識という複雑な思いが垣間見えよう。

大学時代

ふたりは Tuley での高校生活を共にし、Bellow は文化人類学、Rosenfeld は哲学と専攻は異なったが、シカゴ大学に進学する。さらに同じころニューヨークへ（Rosenfeld は 1941 年、Bellow は 1945 年）移り住むというように青春時代をほぼ共有しているのである。

Zetland の「当然のごとく大学へ送られ」、「大学も彼を待っていた」（203）という学生生活は、Bellow も含めた当時のユダヤ系知識人を目指す若者の典型であった。彼は、「詩やエッセイコンテストで賞を取り、大学の文学やマルクスの研究会に入」（203-4）り、トロツキに賛同しスパルタクス団（共産党の前身）の青年部に入る。しかし彼は革命家を志すことはなく、カルナップやバートランド・ラッセルのもとで論理学や哲学を学んでいた。

彼が大学に入って最も良かったことは反目していた父の家を出て、アパート暮らしを始めたことと記されている。その部屋は、「窓もなく」「むき出しの床に敷物が敷かれ」「アパート中のメーターがベッドの上に並んでいる」（204）というものであった。それでも彼は「汚らしければ汚らしいほどよい」（204）と、そこでの生活を楽しんでいる。それは「ボヘミアン」の生活であっただけでなく、「ロシア的」なものでもあった。大家の Perchik はロシア大公に仕えた人間で彼とロシア語での会話も楽しんだ。Bellow や Rosenfeld にとってロシアは敬愛するドストエフスキーの国であり、マルクスの国でもあったのだ。

ここで彼は世話焼きぶりも発揮する。引越しの手伝い、大学院生の子供の世話、病人のための食事作り、ペットの世話や老女のために雪の日に買い物をするなどしているが、“Zetland”の中でも“virtually a Franciscan, a simpleton for God's sake, easy to cheat.” “holy fool”（205）と描かれ、聖フランシスコのように純粋だが騙されやすい、聖なる馬鹿つまりシュレミールと揶揄されている。ここにも Bellow の Rosenfeld に対する厳しい批判精神が見受けられる。

異教徒との結婚

1940 年に Rosenfeld はシカゴでマケドニア系の異教徒の Vasiliki Sarantakis と出会う。彼は親友の Tarcov への手紙の中で、彼女に彼が求めていた「快樂主義と自由」を見出したことを書いている。“Zetland”の中では、妻の名前は、Lottie となっており、出会いはナチスによるオーストリア併合の年である 1938 年になっている。彼女は、「ハイビスカスを口にくわえた異教徒の美女」（208）と紹介され、「喧嘩の仲直りのために乳房にはちみつを塗りたい」（208）セクシーな女性として描かれている。Zetland がコロンビア大学で哲学の奨学金給付研究員の資格を得たことを契機に二人は結婚する。

“Zetland”の中には、二人でイースターのお祈りのために東方教会へ行き、Zetland が「東方

教会流に片膝を曲げて十字を切る」(208)場面も描かれている。当時、異教徒との結婚はかなりタブー視されていたはずである。ユダヤの伝統によればゴイ（異教徒）との結婚は許されず、それを破って結婚すれば、その人は死んだも同然とみなされ家族の絆が断たれたのである。しかも、今は妻らしく甲斐甲斐しく「シャツにアイロンをかけたりトーストにバターを塗ったり、煙草に火をつけ」(209)ているものの、彼女は複数の男性と同棲していた過去もあった。異教徒であるばかりか当時としてかなり不埒な息子の相手に対して、当然のことながら Zetland の父や彼を育ててくれた伯母たちは、伴侶として認めない。ニューヨークへ旅立つ二人を見送りに来た皆は、Lottie と別れのキスをかわすが、それは実は偽りのキスであり、父は汽車が動き始めると「息子を破滅させようとしている Lottie に向って『5 年かかろうが、10 年かかろうが、お前に復讐してやる。この売女、不潔なあま』」(211) と足を踏み鳴らしながら毒づく姿が描かれている。

Zetland は、シカゴ大学に入学した時に一応家族のくびきから逃れたが、ニューヨークへの引っ越しと異教徒との結婚という最大のタブーを破ることでユダヤ教の戒律や家族のくびきに縛られない自由を得たことは相違ない。彼が、移り住んだアッパーサイドのアパートは、台所にバスタブがあり、トースターからパンの代わりにゴキブリがとびだすような窓もろくにない汚らしい安アパートであったが、彼にとっては、「人として正常でいられる場所」(212)であったのである。

哲学から Bellow と同じ文学への転向

Lottie のことがあるため、父は息子の学究生活にも満足しない。仕事向きでない Zetland に代わって彼の研究生生活を社会学の修士号を持つ Lottie が秘書として働くことで支えていくが、やがてこの甘美な新婚生活に影が差す。先にもあったように Zetland は子供のころから病弱であったが、肺の病が復活し熱や痛みで寝込む。子供時代死を意識しながら新聞の漫画欄や聖書の一節を読んでいた時のことを思い出した。そして彼は「役に立たなくなった」「論理学の本をわきへ置く」(216) と、Lottie に書棚にある本のタイトルを聞いていく。その中から *Moby-Dick* を手にし、「2, 3 ページ読むと、彼はもう哲学で博士号を取ることはないだろうと分かった」(216) と文学への転向の一瞬を語っている。

Zetland は、病でせき込みながら Lottie に「もう哲学科でやっていくことはできないと思う」(217) と打ち開ける。妻は、寝言でも哲学を口にしていたのにとあきれが、「あなたが好きでないことをする必要はない。なんでも他のものに切り替えなさいよ。私が全面的に支えるから」(218) と無条件で支持してくれる。

栄光と転落、死

実際、Rosenfeld は 1941 年 3 月に親友の Tarcov へ宛てた手紙の中で彼は哲学を学ぶことへの疑念と、むしろメルビルやホイットマンらの文学作品に惹かれ、*Moby-Dick* を読んでいることを告白している。それでも 1941 年秋からニューヨーク大学で哲学を学ぶフェローシップを受け入れるが、文学への思いを断ち切ることができず、1 年足らずで大学を辞め、*Partisan Review* に小説やエッセイ、*New Republic* に書評を書くようになり、批評家やエッセイとして成功を収めていく。さらに 1946 年、Rosenfeld が 28 歳の時に、彼は、*Passage from Home* を出版する。この作品は、Diana Trilling をはじめとするニューヨーク知識人から熱狂的な支持を受けることになる。徐々に成功しつつあった Rosenfeld の名声が確固たるものとなったのである。

しかし実はその少し前から、Rosenfeld の凋落と死に向けた動きが始まっていた。1944 年、彼は *New Republic* の仕事を辞めて、NY 港のはしけで数か月働く。この間、コーシャー（ユダヤ教の戒律に適った食事）を巡る記事でユダヤ社会から怒りを買ひ、煽情的な作家としてスキャンダルになったこともあったが、それは彼の人生を特徴づけるボヘミアンの特質を示すものであり、評判を高めた側面もあった。Rosenfeld は、Irving Howe が指摘しているように “air of yeshiva purity” をもった、つまり、古き良き時代の純粋さを残した永遠の青年であったのである。

その後、30 代で鬱病を発症すると、妻と 2 人の子供とも疎遠になる。Mikics によれば、1951 年 4 月に Tarcov へ宛てた手紙の中で、「絶望感、それが過ぎ去ることを望んでいる」（104）とつらさを訴え、その 2 年後の手紙では、「50 万年も年取った感じ。再び妻子とやり直したい」（104）と書いている。更に 1955 年 10 月には、シカゴでたった一人暮らす寂しさと妻の Vasiliki を愛することができないことを嘆いている。結局、1956 年 7 月に孤独のうちに亡くなっている。

Bellow の息子の Gregory は、この時のことを次のように記している。

1956 年の夏の朝、Isaac Rosenfeld がシカゴで亡くなったことを告げる電話で起こされた。Saul は悲嘆にくれた。私は Isaac については、断片的な記憶しかなかったが、私も悲しんだ。娘のミリアムによれば、Oscar Tarcov は彼の死の知らせを聞いた後、ショックのあまり、一日中ソファで動けずにいたとのこと。Saul はどうしても Isaac の葬儀に行くことができなかった。Isaac の未亡人の Vasiliki は激怒していたが、父は悲しみを超えて会いに行くことができなかったのだ。

(Gregory, 90)

結局深い悲しみゆえに葬儀にも行けなかった Bellow は *Partisan Review* に、“He died in a seedy, furnished room on Walton street, alone—a bitter death to his children, his wife, his lovers, his father.” という死亡記事を書き、友の孤独の死を悼み家族の心中を思いやったのである。

小説と現実

“Zetland”は、「彼が勢い込んで行動を起こすと、Lottieはいつも彼に味方してくれた。父のいつもの反対にあっても彼をサポートするのだった。」(219)とあるように、ZetlandがLottieの心からのサポートを受けるところで終わっている。最後のパラグラフの冒頭も、「彼らは1940年にブリーカー通りに引っ越し、12年住んだ。彼らはすぐにグリニッジヴィレッジで頭角を現した。シカゴでは二人は知らず知らずのうちにボヘミアンとなっていた」(219)と夫婦の一体ぶりが示されている。

実際には破綻に向かっていた夫婦関係をことさらに美化し、晩年のRosenfeldの孤独と転落が払拭されているのはなぜだろうか。Mikicsは、「BellowはIsaac (Rosenfeld)とVasilikiとの激しい喧嘩や結婚生活が破綻したことをエアブラシで消している」(105)と指摘している。

Bellowはなぜ、親友であるRosenfeldの結婚生活の破たんを「エアブラシ」で消し去る必要があったのであろうか。

激しいライバル意識

親友とはいえ、同じシカゴのユダヤ人コミュニティーで家族や周囲からの期待を一身に受けて大学へ進学した二人の間には、ライバル意識があったことは否めない。まして哲学専攻であったはずのRosenfeldが、文学に専攻を変えて好敵手としてBellowの目の前に立ち上がったのである。一方が成功した際の他方の妬みはかなりのものがある。

二人の対等な友情に変化が訪れる時が来る。先にニューヨークに来ていたRosenfeldは主要雑誌に詩やエッセイ、書評、短編を発表するなどキャリアが開花しており、*The New Republic*の編集者にもなり、1944年には*Partisan Review*に“The Hand that Fed Me”を発表し称賛されている。そして1946年、28歳の時に、彼は、*Passage from Home*を出版し、先にも述べたようにDiana TrillingをはじめとするNY知識人から熱狂的な支持を受け、徐々に成功しつつあったRosenfeldの名声が確固たるものとなった。Bellowも1944年に長編としては初めての*Dangling Man*を出版し、この翌年の1947年には*The Victim*を世に出したことから、着々と作家としての地盤を固めつつあったはずである。事実2人は彼らの小説の主人公が地下生活者であったことから、二人まとめて“The Chicago Dostoyevskians”と崇められたのであった。

Bellowは1952年3月にTarcovへ宛てた手紙の中で、“I loved him, but we were rivals,” (Mikics, 106)と述べており、二人が常に親友という側面だけ持っていたわけではなく、互いに相手の成功を妬むライバルであったことを告白している。

1953年にBellowが*The Adventures of Augie March*を出版し、翌1954年にNational Book Award for Fictionを受賞すると二人の関係に再び変化が訪れる。Rosenfeldは、*Passage from Home*以降、作品を書いても出版を断られるなど不遇の時代を迎えていた。ライヒ主義への

傾倒とそれゆえの自由奔放な生活も大きな要因となっていた。彼はライバルである Bellow の快挙に対して、*Augie March* に失望した旨述べ、負け惜しみとともれる反応を見せる。そして Bellow の方は Rosenfeld の不遇と自分自身の勝利に強い罪悪感を抱くのである。

1950 年代に Rosenfeld は、“Someday Saul or I will win the Nobel Prize.” (Mikics, 106) と語ったという。おそらく二人とも受賞のチャンスがあるが、真に受賞の資格があるのは自分であるとの自信に裏打ちされた発言であったことだろう。実際には 1976 年に Bellow がノーベル文学賞を受賞するが、その時彼は早逝した親友を思い、“It should have been Isaac.” (106) と述べて彼の業績を称えている。

小説のモデル

このように Bellow と Rosenfeld は互いを愛し、ライバル意識ゆえに妬み合い、自分の成功に対して罪悪感を抱くという複雑な感情を持ち続けたのである。このような二人はお互いに相手を作品の主人公のモデルとして描いている。“King Solomon” は、Rosenfeld の死後出版された作品であるが、Bellow をモデルとして描いており、成功していた Bellow への妬みが示されている。

Rosenfeld 死後まもなく同じころ、Bellow は 1959 年に *Henderson the Rain King* を発表しているが、この作品の中で Rosenfeld はアフリカの架空の部族であるワリリ族の王様、King Dahfu として描かれている。Bellow の息子 Greg も Dahfu は Rosenfeld であると指摘している。

ハーバード大学時代の大家にして友人である Chanler Chapman をモデルとした WASP の主人公 Eugene Henderson は、Rosenfeld や Bellow などのニューヨーク知識人とは異なる行動的なタイプの男である。彼は妻子を置いてアフリカへ目的のない旅へ出かけるが、彼が物語の冒頭で感じた重圧や 55 歳という年齢からくる危機は、それよりも若かった Bellow と Rosenfeld の二人にも共通するものであったことだろう。彼は、“I want” というところの叫びに導かれてアフリカへ行き、そこで出口を求めるわけだが、その彼がアフリカで見つけた師が Dahfu 王なのである。彼は、百獣の王ライオンをあたかも猫のように扱うことでライオンの恐怖を克服することを Henderson に教える。Dahfu 王はメスライオンの効能について説き、Henderson にライオンのごとく吠えることで自分をさらけ出すことを求める。これは多くの批評家もすでに指摘しているように、Rosenfeld が強い影響を受けたライヒ主義の訓練であり、ダーフ王はライヒ主義のセラピストの役割を果たしていると思われる。実際、Bellow が初めてライヒ主義に接したのも Rosenfeld を介してであった。

Henderson はアフリカへの旅で解放されるが、物語の終盤 Dahfu 王は、部族の祭司長の奸計に会い死を迎える。Mikics はダーフ王の死を防ぐことができなかったことと、Rosenfeld の死を重ね合わせて、“The proud African king was Bellow's idealized image of what Rosenfeld longed for

but could never achieve, a brave freedom.” (111) と分析している。つまりここには、親友である Rosenfeld に対して負っていた義務を覆い隠そうとするあがき、つまり死の淵に立っていた友に対してなんら親友らしいことをなしえなかったことに対する Bellow 自身の悔恨の念が隠されているのである。理想化した Rosenfeld のモデルとして描いた Dahfu 王の最後を通して、友人を救えなかった Bellow の無念さと罪悪感がここに表出している。

“Zetland” の結末が意味するもの

1962 年に死後出版された Isaac Rosenfeld, *An Age of Enormity* の序文に寄せた Bellow の文章からは、若かりし頃の生き生きとした Rosenfeld の佇まいが覗い知れる。

Isaac は丸顔で黄色がかった茶色の髪を後ろに撫でつけていた。彼は近眼で淡い青色の目をしており、丸い眼鏡をかけていた。大きな歯の隙間から屈託のない笑いを浮かべた。彼は腹の底から笑った。突然笑いがこみ上げてきて、身体を折り曲げて笑うのだ。しかし彼の笑いはゆっくりと火がついた。彼は眼鏡越しに伯父のように賢そうに見ることを好んだ。気の利いた冗談が言われる前に、しばしば、淡い青色のまなざしが向けられる。彼は話はじめ、言葉をとぎらせ、口元に茶目っ気を醸し出す。それから何かがっかりさせるようなことを言うのだ。さらに真剣に議論を発展させると、ロシア系ユダヤ人の知識人のように 2 本の指で煙草を挟む仕草をする。本当にまじめな時には、マンネリズンは追いやる。ほとんど怒りともいえる力強い眼差しが目に宿る。Mikics, 95 - 6

Rosenfeld と愛憎関係にあった Bellow だが、Rosenfeld の死後、彼に向ける眼差しは間違いなく温かい親友のものであり、Rosenfeld の死後 20 年近くへた 1974 年に書かれた“Zetland”になると親友へのライバル意識は完全に消え去り、残ったのは彼への強い思いのみだった。このため、親友の離婚や文学的な凋落、そしてその果ての孤独な死は、Bellow がなんとしても「エアブラシで消し」てしまいたい不都合な真実であり、彼の人生を美化することで親友に対して抱いていた罪悪感の穴埋めをし、友への義務を果たしたといえよう。“Zetland”は、Rosenfeld の葬儀にも行けなかった Bellow が、愛する友に捧げたオマージュなのである。

参考文献一覧

- Atlas, James. *Bellow: A Biography*, New York: Random House, 2000.
Bellow, Greg. *Saul Bellow's Heart: A son's Memoir* New York: Bloomsbury, 2013.
Bellow, Saul. “Zetland : By a Character Witness” *Him with His Foot in His Mouth and Other Stories* New York: Pocket Books, 1985. 195-219.
----. *Henderson the Rain King* New York: The Viking Press, 1958.
Mikics, David. *Bellow's People: How Saul Bellow Made Life into Art* New York: Norton, 2016.
“Guide to the Isaac Rosenfeld Papers 1026-1983” University of Chicago Library, 2011. 1-14.